

「母がおじからきょうだいを」  
(カトウツルス III 番 4 行)

友井太郎

I はじめに

Auffillena, uiro contentam uiuere solo,  
nuptarum laus ex laudibus eximiis:  
sed cuiuis quamuis potius succumbere par est,  
quam matrem fratres ex patruo ...

I aut fillenam O, auffilenam (-mam R) X: -ena γ contemptam  
O 2 ex Passerat (e iam Scaliger): est V est ...ex nimiis  
Baehrens 3 pars V: corr. ζ 4 efficere ex p. 1472, ex p.  
parere Doering, alii alia: lacunam exhibuit V

アウフィッレーナよ、ひとりの夫に満足して生きるのは  
妻にとってなみはずれた榮譽の中の榮譽だ。  
だが誰であれ女は誰とでも寝ることのほうがふさわしい  
母がおじからきょうだいを……よりも。

(カトウツルス III 番\*1)

カトウツルス III 番 4 行には 2 つの大きな問題がある。

- (1) 第一に、伝承されたテキストそのものの問題である。pentameter の I 行として成立するためには音節の数が足りず、構文上も不足が生じて意味を取ることができない。したがって、1-2 単語の欠落か、それ以上の損壊がこの行で起こっていることが確実である。
- (2) 第二に、解釈における問題である。matrem 「母」、fratres 「きょうだい」、patruo 「おじ」と家族や親戚を指す 3 つの語が続けざまに並べられているが、これらが具体的にはどのような親族関係を表しているのか判然としない。

本小論の目的は、これらの問題をめぐって行われてきた議論を概観し、(1) の問題につ

\*1 本小論中、カトウツルスのラテン語本文とその apparatus criticus には、Mynors 校訂の OCT 版を用いる。日本語訳は筆者による。

いて有力な校訂案の 1 つが最も支持できるものだと示したうえで、(2) の問題について新しい解釈の可能性を提出することである。

## 2 詩全体の内容

4 行目の問題に絞った本格的な議論を始める前に、まず III 番全体の内容を確認しておきたい。

呼びかけの対象となっているのはアウフィッレーナ *Auffilena* という女性であるが、III 番の直前に置かれた以下の詩によると、この女性はカトゥッルスとの情事の約束を破ったらしい。

*Auffilena, bonae semper laudantur amicae:  
accipiunt pretium, quae facere instituunt.  
tu, quod promisti, mihi quod mentita inimica es,  
quod nec das et fers saepe, facis facinus.  
aut facere ingenuae est, aut non promisse pudicae,  
Auffilena, fuit: sed data corripere  
fraudando officiis, plus quam meretricis auarae (est),  
quae sese toto corpore prostituit.*

1 *Auffilena V*      2 *quae] quia O*      3 *promisisti V:*  
*corr. γ*      4 *et B. Guarinus: nec V*      5 *promisse B. Gua-*  
*rinus et Parth.: promissa V*      6 *aut fillena O, auffilena X*  
7 *officiis Bergk, effectis Ellis, efficit β: efficit V*      *est add. Calph.*  
8 *toto γ, totam Westphal: tota V*

アウフィッレーナよ、良き女友だちはいつも賞賛されるぞ。

彼女たちは自分がしようとすることの報酬を得ているのだ。

君は、自分が約束したことについて友だち甲斐なく私に嘘をついたので

しばしば与えずして持っていくので、悪を為しているのだ。

履行することが高貴な女のすることだ、あるいは約束しないことが貞潔な女の

アウフィッレーナよ、することだった。だが、義務において騙しつつ

与えられたものを奪い取ることは、全身をもって自分を売春に供する

強欲な遊女のすること以上である。

(カトゥッルス IIO 番)

この IIO 番では、情事の約束を守るか、貞潔な女として初めからそのような約束をしないか、どちらかにするべきだということが主張されている。続く III 番 I-2 行目「ひとりの夫に満足して生きるのは妻にとってなみはずれた榮譽の中の榮譽だ」*uiro contentam uiuere solo, | nuptarum laus ex laudibus eximiis* は、IIO 番でいわれているような貞潔な女の

名誉を、生涯ひとりの夫としか結婚したことの無い女(いわゆる *uniuira*) の名誉とも重ねつつ、取り上げているといえよう。

ところが 3 行目には、「だが誰であれ女は誰とでも寝ることのほうがふさわしい」 *sed cuius quamuis potius succumbere par est* と、一転して多情、淫奔を許す内容が続いている。そして、4 行目 *quam* 以下では「誰とでも寝ること」のほうがいったい何よりもふさわしいのか述べられているようなのである。

### 3 テクストの問題

前節で述べた通り、III 番 4 行目は前行にある「誰とでも寝ること」 *cuius succumbere* との比較の対象になっていると考えられる。すると、*succumbere* に対応する動詞の不定法を補うことが、最初に検討されるべきこの行への修正案となるはずである。

それでは、どんな意味の動詞を補うべきか。3 行目でよりましとされているのは誰とでも交わることであり、4 行目には *matrem, fratres, patruo* と家族、親族を指す単語が並べられていることから、カトウツルスが多くの子で取り上げている近親相姦<sup>\*2</sup>、もしくはそれに類するモチーフが、ここでも登場しているだろうと推測できる。そして、90 番では母とその息子との近親相姦によって生まれる子が取り上げられているのと同じように、III 番でも *matrem* が *patruo* と交わって *fratres* を産むという内容が述べられているのであろうとの考えをもとに、多くの補充案が提出されてきた。それらのうち有力なものひとつは、15 世紀イタリアですでに提案されていた<sup>\*3</sup>という *parere* である。以下に分類する通り、最近の校訂本等の多くは (1) *parere* (または *te parere*) を補うか、(2) 何も補わないかのいずれかを選択している<sup>\*4</sup>。

(1a) *quam matrem fratres ex patruo parere*<sup>\*5</sup>

「母がおじからきょうだいを産むよりも」

Cornish (Loeb),<sup>\*6</sup> Lafaye (Budé), Thomson

(2a) *quam matrem fratres ex patruo ...*

\*2 Rankin を参照せよ。

\*3 Zicari, p. 155

\*4 選択されている案は他にも 1 つ存在するが、これについては次節で述べる。

\*5 Trappes-Lomax, p. 293 および p. 305 (Bibliography) によれば、1834 年に Altona で出た F. G. Doering 校訂の版において、この修正案が提出されたという。なお、Trappes-Lomax もこの読みを支持している。

\*6 Cornish, Postgate, and Mackail (trs.), *Catullus Tibullus Pervigilium Veneris*. ただし、Introduction 中の記述 (p. viii) によれば、この版のラテン語本文は J. P. Postgate, *Gaii Valerii Catulli Carmina*, London 1889 をもとにしている。

Ellis (OCT),\*7 Mynors (OCT), Quinn\*8

(1b) quam matrem fratres te parere ex patruo

「お前が母としておじからきょうだいを産むよりも」

Friedrich,\*9 Schuster (Teubner), Bardon (Teubner)

(2b) quam matrem fratres ... ex patruo

Kroll, Eisenhut (Teubner)

以上の通り、欠落を (a) 行末に想定するか、(b) 行中 *fratres* と *ex patruo* との間に想定するかでも意見が分かれている。そして韻律の都合上、行末の欠落に補えるのは *parere* である一方で、行中の欠落に補えるのは *te parere* である。では、欠落の位置は行末と行中どちらなのであろうか。この問題を検討するために参考となるのは、まず Zicàri の論考である。Zicàri は、pentameter の行末にくる音節は原則として長い行末に *parere* を補うのは不相当であるという説に対して、(1) カトゥルスにその原則は必ずしも当てはまらない\*10 ことと、(2) 行中に *te parere* と *te* 「お前が」も補うと、3 行目 *cuius quamuis* 「誰であれ女は誰とでも」など一般論で述べられてきた文脈と齟齬をきたすことを指摘する。この論考によって、行末に *parere* を補うという修正案に反対する根拠は薄弱であり、行中に *te parere* を補うという修正案を採用するのは難しいことが示された、私は考える。

もともと、行中から *te parere* 以外の語が欠落したという想定は依然可能かもしれない。実際、*fratres efficere ex patruo* や *fratres concipere ex patruo* などと、*parere* 以外の動詞の不定法を補って *parere* 同様の意味を持たせる修正案が提出されてきた\*11。だが、Zicàri の論考には *parere* を採るべき理由が 3 つ挙げられている。(1) 碑文上のエピグラム *CLE* 980 = *CIL* II 3475 に *matres* が子供を産むという意味で *parere* が用いられ、かつそれが pentameter の行末に置かれているという類例が見つかる\*12、(2) *patruo parere* という語の連続に頭韻

\*7 Ellis (ed.), *Catulli Carmina*

\*8 ただし、この版のラテン語本文は Mynors の OCT 版をもとにしているようであるし (Introduction 中にこの版の本文と Mynors の OCT 版のそれとの異同表 (pp. xxv–vii) が示されている)、註釈 (p. 450) では *ex patruo* の前か後に欠落があると述べている。

\*9 Friedrich によって、この修正案が最初に提出された。

\*10 Zicàri によれば、pentameter の行末が単音節である割合がオウィディウスでは 100 行に 1 回だけなのに対し、カトゥルスでは 14 行に 1 回もあるという。

\*11 Ellis, *Catulli Veronensis Liber* は (自身の OCT 版とは異なり) 行中に *concupere* を補う修正案を本文として印刷している。また、Oksala, p. 101 は、*parere* よりも *concupere* のほうが意味上も用法上も適していると述べているが、具体的な例を引いての議論ではない。

\*12 ラテン語本文 (*CLE* による) および日本語訳 (筆者による) は次の通り。Hospes consistit et Thoracis perleget nomen: | inmatura iacent ossa relata mea. | saeua parentibus eripuit Fortuna m[ei]s me | nec iuenem passast ulteriora frui. | nihil simile aspicias. timeant uentura parentes, | nec nimium matres concupiant parere. 「客人よ、

の効果が認められる、(3) 3 行目の行末 *par est* との類似が、4 行目の行末 *parere* が欠落してしまっただけの理由になり得る。

これら Zicari の挙げた理由に加えて、(Forsyth\*13 が言うとおりに) Merrill の意見\*14 も行末に *parere* があつたという推測を補強するものである。Merrill は (1) *matrem, fratres, patruo* が途切れなく並べられていることが性的関係の混乱を示すのによく合っている、(2) III 番の直後の II2 番の I 行目も行末に欠落が想定されており、現存の写本伝承の archetype は III 番 4 行から II2 番 I 行にかけて行末の部分が汚損されていたのではないか\*15、と述べている。

以上より、もし単純な語の欠落を想定するのであれば、その欠落は行末に置かれるべきである(単純な語の欠落以上の損壊を想定する修正案の検討は、次節で行う)。そして、提案されてきた中で現状もつとも蓋然性の高い補いは *parere* である。

## 4 解釈の問題

III 番 4 行のテキストの問題に続いて、次は解釈の問題について検討しよう。欠落した語とその位置については意見が分かれているにも関わらず、内容が「*matrem* が *patruo* と交わって *fratres* を産む」というものであることについては、特に異論が見当たらない。しかし、これを「母がおじからきょうだいを産む」と訳し、「ある女が自身のおじと交わって自身のきょうだいの母となる」と解釈すると、ただちに問題が生じる。もし、ある女が自身のおじと交わって子を産んだならば、女にとってその子供は自身のおじの子であるという理由で、自身の「きょうだい」でなく「いとこ」にあたるはずである。

最初に、この問題を解釈によってではなく、テキストの修正によって解決しようという考えを紹介することとする。Wiman が提出し\*16、Oksala が同意し\*17、Goold が自らの羅英対訳版\*18 と Loeb 改訂版\*19 で採用した修正案は、写本伝承の *patruo* 「おじ」を *patre*

---

立ち止まってトラークスの名を読みたまえ。私の夭折した骨が戻って横たわっている。残酷なフォルトゥーナ(運命)が私の両親から私を奪い去り、若者がもっと先まで楽しむのを許さなかった。あなたは似たものを見ないように。両親は将来を恐れるように、そして母が多くを産みすぎることを欲しないように」。

\*13 Forsyth, p. 222 n. 8

\*14 Merrill, p. 261

\*15 もつとも、この推測と *par est* との類似による *parere* の欠落という Zicari の推測とは両立しないものではあるが。

\*16 Wiman, p. 37

\*17 Oksala, pp. 101-2

\*18 Goold, *Carullus*

\*19 Cornish, Postgate, and Mackail (trs.), Goold (rev.), *Catullus Tibullus Pervigilium Veneris*

「父」に変え、*quam matrem fratres ex patre co*(ncipere) (「母として父からきょうだいを得るよりも」) とするものである。

なるほど、この修正案では *ex patruo* 「おじから」生まれた子がなぜ *fratres* 「きょうだい」になるのかという問題は解決する。しかし、疑問も残る。*concipere* のいわゆる意味上の主語である *matrem* を「母が」ではなく「母として」と訳せる理由は、この *matrem* が具体的には詩の呼びかけの対象の *アウフィッレーナ* だということであろう。すなわち、*Wiman* の修正した行は「*アウフィッレーナ* が母として父と交わり自身のきょうだいにもあたる子を産む」ということを意味しているというのである。だが *Zicari* の述べていた通り、この行は一般論として述べられている。だから、「母が父からきょうだいを産む」と直訳するほうが適当であるし、その場合にこの行は、子供からみての母が、子供からみての父との間に、子供からみてのきょうだいを産むという、あまりにも当たり前のことを述べているように見えてしまう。

もしも、父と娘が交わって子をなすという近親相姦への攻撃を効果的に行いたいのであれば、*matrem* 「母が」ではなく (*g*)*natam* 「娘が」とすべきであろう。先に挙げた 90 番は *matre* 「母」、*gnato* 「息子」という語を用いて近親相姦によって子が生まれる事態を描いている (3 行目) し、64 番 403-4 行も同様に *mater*, *nato* という語で母と息子の近親相姦に言及している。以上より、*Wiman* による修正案を受け入れることはできない。

テキストの修正によって解釈の問題を消し去ってしまうことができないとすれば、伝承されたテキストに立ち戻るしかない。そこで、伝承されたテキストに対して行われてきた解釈を検討していこう。

*ex patruo* 「おじから」*fratres* を産むという表現に対する解釈としてもっとも一般的なのは、この *fratres* が「きょうだい」ではなく *fratres patruales* 「いとこ」を指すのだというものである\*20。註釈者、翻訳者の中でも *Ellis*, *Kroll*, *Lafaye*, *Quinn* らがこれを採用している。

ただし、この中で *Ellis* は、ある女が自身のきょうだいと交わったため、その間の子供たちにとって父は母のきょうだい、すなわちおじであり、子供たちはお互いにきょうだいどうしであると同時に、おじの子という意味でいとこどうしでもある状況 (図 1) を描いているというのが最もありそうだとしている\*21。この少数説は *Kroll* によって、母のきょうだいは *patruus* ではなく *auunculus* であるという理由で斥けられており\*22、私も特段擁護する必要を感じない。

\*20 *frater patruelis* が「いとこ」の意であることについては、*OLD*<sup>2</sup>, s.v. 'frāter' 2; *ThLL*, VI 1254.68 ff. を見よ。

\*21 *Ellis*, *A Commentary on Catullus*, p. 493

\*22 *Kroll*, p. 284

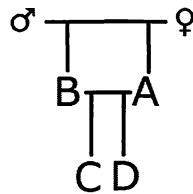


図 1

(図 1 においては、女 A が自身のきょうだい B と交わっている。子 C, D にとって A は母、B は母のきょうだい、すなわちおじとなる。子 C, D はお互いにきょうだいどうし (同じ両親の子) であると同時に、いとこどうし (おじの子) でもある。)

真剣に考慮されるべきは、ある女が母として自身のおじとの間に自身のいところにもあたる子を産むという状況 (図 2) を描いているとする多数説である。

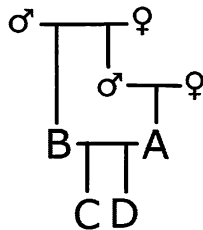


図 2

(図 2 においては、女 A が自身のおじ B と交わっている。子 C, D は、その母 A にとって自身のいとこ (おじの子) でもある。)

Kroll も指摘しているように、クラウディウス帝とアグリッピナの結婚までおじとそのめいとの間の結婚は許されていなかった。したがって、上記の解釈を取った場合でもカトウツルス III 番 4 行の内容は近親相姦への攻撃となり得る。さらに Watson はこの解釈に基づき、III 番全体を捉えなおしている。アウフィッレーナは I-2 行で描かれているような I 人の男に忠実な女なのだが、その男は 4 行目で述べられている通り彼女のおじであるという状況を想定すれば、詩全体がより効果的なものとして解釈できるというのである\*23。

\*23 なお、Skinner, *Catullus in Verona*, p. 222 n. 84 に 'It is highly unlikely that Aufillena is actually married to her uncle, as Watson 1985 proposes' とあるが、実際には Watson は 'The marriage is not a real marriage, of course'

しかしながら、*fratres* は読み手の知識が前提できたり、文脈上明らかだったりしなければ一語で「いとこ」を意味しえず、したがって上で紹介したような解釈はできないという説がある。de Grummond は 1970 年に *The Classical World* 誌上で発表した論考で、これを主張した上で III 番への新しい解釈を提出した。もっとも、直後の 1972 年に同じ *The Classical World* 誌上で Bush が de Grummond の説への反論を発表している。Bush はラテン語において *fratres* がそれだけで「いとこ」の意にも用いられうることを多くの例に即して論じており、de Grummond の出発点である *fratres* はそれだけでは「いとこ」を意味しえないという主張の正当性は薄い。また、Syndikus はいとこを *fratres* 「きょうだい」と呼ぶことが戦慄の効果を高めると述べているが\*24、これは誤解を招きかねない *fratres* という語があえて用いられている説明になりうる。

それでもなお、de Grummond が新たに提案する解釈には、魅力がある。彼はアウフィッレーナが夫との間に嫡出子 *legitimate child* をすでにもうけており、その子からみての母が、その子からみてのおじと交わって、その子からみてのきょうだいを産むという状況(図 3)を想定しているのだが、この解釈には *matrem*, *fratres*, *patruo* という家族、親族を指す名称が、誰からみてのものであるか統一されているという美点がある。他方で、女が母として自身のおじと交わりいとこを産むという解釈(図 2)の場合、*matrem* は生まれた子供から見ての母であるのに対し、*fratres*, *patruo* はその *matrem* からみてのいとこ、おじとなってしまう。

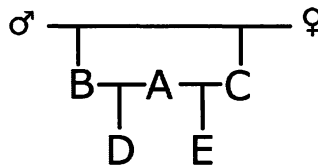


図 3

(図 3 においては、女 A が自身の夫 B との間に嫡出子 D を産んでいる。D からみての母 A が D からみてのおじ C と交わって、D からみてのきょうだい E を産む。これは A からみて、夫のきょうだいとの不倫である。)

こうした理由からか、Thomson は自らの註釈の中で de Grummond と Bush の論考のど

と書いている。Skinner の記述は誤読に基づくものか、少なくとも誤解を招くものであろう。同じ Skinner のサーヴェイ論文 Skinner, 'A Review of Scholarship on Catullus 1985-2015', p. 341 における Watson の論文の要約は、より正確である。

\*24 Syndikus, p. 132



ちらも参考文献として挙げつつ、前者の想定する状況が最も説得力があるものだと述べている。また、Bush のいう通りに *fratres* が「いとこ」の意にとることができる語だとしても、無論「いとこ」の意にしか取れないということにはならない。Skinner は、*fratres* は「いとこ」であり、アウフィッレーナは自身のおじと近親相姦したという解釈(図 2)と、*fratres* は「きょうだい」でありアウフィッレーナは自身の夫のきょうだいと不倫したのだという解釈(図 3) いずれの可能性も認めたくえて、そのどちらかだけを選ぶべきではなく、この詩は両義性によってアウフィッレーナの家の錯綜した血縁関係を示唆しているのだと述べている\*25。

このように、*fratres* を「いとこ」ではなく「きょうだい」と訳し、アウフィッレーナが自身の夫のきょうだいと不倫していたとする de Grummond の説は、一定程度受け入れられているようである。しかしながら、この読み方にも問題があると、私には思える。それは、(Wiman によるテキストの修正案を斥けたときと同様に) *matrem* の解釈をめぐってのものである。de Grummond は *matrem* が 2 行目の *nuptarum* 「妻」と対になっていると考える。そして、アウフィッレーナがひとりの夫に満足しないことで妻としての夫への義務を果たさず、夫のきょうだいとの間に不義の子をなすことで母としての嫡出子への義務も果たさないというのが、III 番の要点だというのである。しかし、II0 番、III 番とつながる文脈を考えに入れれば、この解釈には疑問が生じる。II0 番でカトウツルスはアウフィッレーナが自身との情事の約束を破ったことを非難している。間男志願者のカトウツルスに、アウフィッレーナの不倫を非難する正当性もなければ、動機もないのではないだろうか。

カトウツルスが III 番 1-2 行目で一般論的に名誉ある妻のことを書いたのは、3 行目で 4 行目の内容よりましとされる多情、淫奔と対比するためであり、ことさらアウフィッレーナ自身の妻としての義務の放棄を攻撃するためだとは思えない\*26。それゆえ、4 行目で母としての義務の放棄を攻撃しているというのも、あまりありそうにないことである。そもそも、アウフィッレーナはすでに子供をもつ母であるということは、詩集の中で他のどこにも書かれていないことである。その状況で言われる *matrem* が果たして母としてのアウフィッレーナを意味しうるのか、そしてどこにも存在を明記されていない子供を *matrem*, *fratres*, *patruo* と呼ぶときの視点とすることができるのか、疑問が残る。

\*25 Skinner, *Catullus in Verona*, p. 136

\*26 Watson のいう通り 1-2 行目がアウフィッレーナとそのおじとの間の *faithful union* を揶揄するものだという可能性はある。この解釈は、III 番全体の統一性を説明するものとしてはもっとも整ったものであるとさえ評価し得るだろう。しかしながら、なぜ 4 行目に *matrem* という語が用いられているかの説明はできていない。

さて、準備が整ったところで私からの新たな解釈の提案を行う。これまで説明してきたように、matrem にアウフィッレーナを当てはめる困難が III 番の解釈の急所となっているようである\*27。私はこの matrem がアウフィッレーナ本人ではなく、アウフィッレーナの母を指している可能性を指摘したい。同様に、fratres はアウフィッレーナのきょうだい、patruo はアウフィッレーナのおじを指すとする。この場合、アウフィッレーナの母がアウフィッレーナのおじ、すなわち母の夫のきょうだいとの間に、アウフィッレーナのきょうだいに当たる子供を産むという状況（図 4）が想定されていることになる。

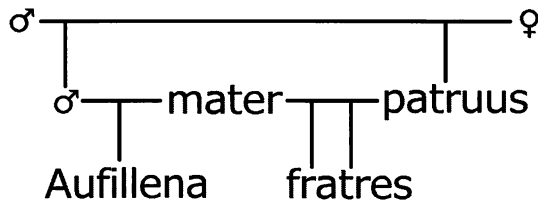


図 4

じっさい、アウフィッレーナの男きょうだいアウフィッレーヌスは、以下に示す 100 番の詩ですでに存在が明らかになっているのである。

Caelius Auffillenum et Quintius Auffillenam  
 flos Veronensum depereunt iuuenum,  
 hic fratrem, ille sororem. hoc est, quod dicitur illud  
 fraternum uere dulce sodalicium.  
 cui faueam potius? Caeli, tibi: nam tua nobis  
 perspecta ex igni est unica amicitia,  
 cum uesana meas torreret flamma medullas.  
 sis felix, Caeli, sis in amore potens.

1 Gellius *O*, Caelius *X* auffillenum, -nam *V* 2 treronensum *O*, ueronensum *G*, trenorensium al. ueronensum *R* depereunt  $\eta$ : depereret *V* (al. -ant *R*) 6 perspecta  $\zeta$ : perfecta *V* ex igni Schöll (*sed ex uix recte*), egregie *Baehrens*: est igitur *O*, est exigitur *G*, est igitur al. exigitur *R*

\*27 Friedrich が行中への *te parere* 挿入を提案する理由も (1) *patruo* という決定的な語を詩の最後に置きたいということに加えて、(2) *cuius* に *patruo* が対応しているように、*quamuis* に *te* を対応させなければならないということである。ここにも *matrem* だけでアウフィッレーナを指すのは困難であるという判断が存在しているものと考えられる (p. 545)。また、Forsyth, p. 222 もアウフィッレーナが自身のおじと交わって自身にとってのいとこにもあたる子を産むというだけではアウフィッレーナを *mater* と呼ぶ必要はないとして、彼女にとって自身のいとこ *fratres* にもあたる子が彼女の他の子供にとってのきょうだい *fratres* になるという、*frater* の両義性を利用した表現になっていると解釈している (*fratres* がアウフィッレーナの子供からみての「きょうだい」であるという点は、de Grummond の説を一部取り入れているといえる)。

カエリウスはアウフィッレーヌスに、クウィントウスはアウフィッレーナに  
 ウェーローナの若者たちの中の花が死なんばかりに恋い焦がれている、  
 この男は男きょうだいに、あの男は女きょうだいに。これはいわゆるあの  
 実に甘美なるきょうだいの結びつきである。

私は誰のほうを応援しようか。カエリウスよ、君をだ。というのも、君の私への  
 唯一無二の友情は火によって確かめられたのだから、  
 狂った炎が私を骨の髄まで焼いていたときに。

幸運であれ、カエリウスよ、恋において有力であれ。(カトウツルス 100 番)

また、*mater* という単語の用例はカトウツルスの詩集の中に 30 あるが\*28、属格、与格  
 や人称形容詞による限定なしで呼びかけの相手の母を指しているものが、そのうち 4 つあ  
 る\*29。*mater* という単語は、それだけで「あなたの母」を意味するといえる。

アウフィッレーナ本人ではなく、アウフィッレーナの母の不倫を攻撃するのは、先に取り  
 上げた Skinner のように、アウフィッレーナの家血縁の錯綜、家のスキャンダルへの  
 攻撃だと考えてよいだろう。家のスキャンダルの暴露として、カトウツルスには 67 番と  
 いう類例がある。そして、女性個人の多情、淫奔の方がこのような家のスキャンダルより  
 ましたという攻撃は、110 番の文脈とも合致していると考えることができる。アウフィッ  
 レーナの家のように姻戚関係の内部で不倫をされると、その外部のカトウツルスには入っ  
 ていく隙がなくなる。だから、110 番のように情事の約束を破られることにもなる。こん  
 なことなら、誰とでも寝る女の方がました。このように、III 番を解釈することが可能で  
 ある。

## 5 結論と展望

(1) カトウツルス III 番 4 行の本文は *quam matrem fratres ex patruo parere* とするのが最  
 善である。(2) この行が描いている状況は、アウフィッレーナの母がアウフィッレーナの

\*28 McCarren (ed.), p. 104

\*29 34 番 7 行 *mater* は 5 行目で呼びかけられているデアーナ Latonia の母ラートーナ；62 番 61 行 *matre* と  
 63 行 *matri* は 59 行目で呼びかけられている *uirgo* の母；64 番 23 行 *matrum* は同じ行で呼びかけられて  
 いる *heroes, deum genus* の母(ただし、この *mater* の複数属格自体が 23b 行の呼格 *progenies* を限定するも  
 の)。これらに加えて、88 番 1 行 *matre* は一般論として述べられているが、事実上 1 行目で呼びかけられ  
 ているゲッリウス Gelli の母を指しているとみられるし、90 番 1 行 *matris(que)* と 3 行 *matre* も詩の誹謗  
 対象であるゲッリウスの母を指しているが、この 90 番の中にはゲッリウスへの呼びかけやゲッリウスを  
 2 人称で扱う動詞、代名詞等が用いられていない。なお、9 番 4 行 *matrem* も 1 行目で呼びかけられてい  
 るウェーラーニウス Verani の母だが、3 行目 *tuos penates* の *tuos* が *matrem* も事実上限定していると考え  
 られるため除外した。

おじと交わってアウフィッレーナのきょうだいを産んだというものの可能性がある。

以上2つの結論のうち、後者から導かれる今後の展望についても、ここで少々述べておきたい。カトゥッルス III 番の解釈が難しい理由は、そもそも曖昧な表現が用いられているためである。今回私が提案した解釈にしても、読者がアウフィッレーナの母の醜聞を先に知っているのであれば、容易に到達できるものではないかもしれない。詩によって他者を誹謗するとき、カトゥッルスは同時代の読者の知識をどこまで前提していたのだろうか。また、私の解釈では誹謗したい相手本人の行動ではなく、その肉親（母とおじ）の行動を攻撃しているということになる。これは効果的なことだったのだろうか。III 番の解釈をめぐる議論は、カトゥッルス誹謗詩全般における社会的背景と、その中での詩人の戦略の検討へとつながることとなるだろう\*30。さらに、私や de Grummond の解釈を採る場合、カトゥッルスは近親相姦ではなく、（直接の血縁はないが）姻戚関係がある者との不倫を特に悪いものとして攻撃しているということになる。当時のローマ社会の性的モラルを考えるうえでも、この詩をめぐる議論は1つの材料を与えてくれることだろう\*31。

（東京大学）

## 参考文献

*CIL* = *Corpus Inscriptionum Latinarum*

*CLE* = F. Buecheler (ed.), *Carmina Latina Epigraphica*, Leipzig 1895–1926

*OLD*<sup>2</sup> = P. G. W. Glare (ed.), *Oxford Latin Dictionary*<sup>2</sup>, Oxford 2012

*TbLL* = *Thesaurus Linguae Latinae*

\*30 表現の曖昧さによって、具体的な事実関係を把握しづらい誹謗的な詩として他に挙げるべきは 67 番である。すでに述べた通りこの詩は、私の解釈における III 番と同様に、家のスキャンダルを暴露するものであることに注意されたい。誹謗したい相手本人ではなく、それに近い者を攻撃する詩としては 41, 43 番がある。この2篇は Aemeana (?) という女性を対象とした誹謗詩だが、実際にはその情夫であるマームツラ（メントウラ）への攻撃（29, 57, 94, 105, 114, 115 番）の一環であると考えられている。そして、マームツラ（メントウラ）に庇護を与えるカエサル（29, 57 番）こそが、最終的な攻撃目標であるともいえる。では、アウフィッレーナ詩（少なくとも、あからさまに攻撃的な 110, 111 番）の誹謗対象は、本当にアウフィッレーナという一女性なのだろうか。ローマ社会においてカトゥッルスと直接的に張りあう男性が、アウフィッレーナの裏に本当の攻撃目標として存在するのではないだろうか。こうした想像は、III 番がアウフィッレーナ自身の行動ではなく、その家のスキャンダルを暴露するものではないかという私の仮説に、より実質的な意味をもたせるものであると考えている。

\*31 本稿の作成にあたり、2名の匿名の査読者から有益なご助言を賜った。また、東京大学西洋古典学研究室博士課程の同僚である本田拓也氏には校正に協力して頂いた。この場を借りて感謝申し上げる。それでもなお残る誤りや不備は、むろん全て筆者の責任である。

- Bardon, H. (ed.), *Catulli Veronensis Carmina*, Stuttgart 1973
- Bush, A. C., 'A Further Note on Catullus III', *CW* 65 (1971-2), pp. 148-51
- Cornish, F. W., Postgate, J. P., and Mackail, J. W. (trs.), *Catullus Tibullus Pervigilium Veneris*, London 1913
- Cornish, F. W., Postgate, J. P., and Mackail, J. W. (trs.), Goold, G. P. (rev.), *Catullus Tibullus Pervigilium Veneris*<sup>2</sup>, Cambridge, Mass. 1988
- de Grummond, W., 'A Note on Catullus III', *CW* 64 (1970-1), pp. 120-1
- Eisenhut, W. (ed.), *Catulli Veronensis Liber*, Leipzig 1983
- Ellis, R., *A Commentary on Catullus*<sup>2</sup>, Oxford 1889
- (ed.), *Catulli Veronensis Liber*<sup>2</sup>, Oxford 1878
- (ed.), *Catulli Carmina*, Oxford 1904
- Forsyth, P. Y., 'Quintius and Aufillena in Catullus', *CW* 74 (1980-1), pp. 220-3
- Friedrich, G., *Catulli Veronensis Liber*, Leipzig & Berlin 1908
- Goold, G. P., *Catullus*, London 1983
- Kroll, W., *Catull*<sup>5</sup>, Stuttgart 1968
- Lafaye, G., *Catulle Poésies*, Paris 1922
- McCarren, V. P. (ed.), *A Critical Concordance to Catullus*, Leiden 1977
- Merrill, E. T., *Catullus*, Cambridge, Mass. 1893
- Mynors, R. A. B. (ed.), *C. Valerii Catulli Carmina*, Oxford 1958
- Oksala, P., *Adnotationes Criticae ad Catulli Carmina*, Helsinki 1965
- Quinn, K., *Catullus The Poems*<sup>2</sup>, London 1973
- Rankin, H. D., 'Catullus and Incest', *Eranos* 74 (1976), pp. 113-21
- Schuster, M. (ed.), *Catulli Veronensis Liber*<sup>2</sup>, Leipzig 1954
- Skinner, M. B., *Catullus in Verona*, Columbus 2003
- 'A Review of Scholarship on Catullus 1985-2015', *Lustrum* 57 (2015), pp. 91-360
- Syndikus, H. P., *Catull Eine Interpretation Dritter Teil Die Epigramme (69-116)*, Darmstadt 1987
- Thomson, D. F. S., *Catullus*, Toronto 1997
- Trappes-Lomax, J. M., *Catullus A Textual Reappraisal*, Swansea 2007
- Watson, L., 'Aufillena and her uncle: Catullus III', *LCM* 10 (1985), p. 80
- Wiman, G., 'Ad Catulli textum critica', *Eranos* 61 (1963), pp. 29-37
- Zicari, M., 'Schedae Sex', *Philologus* 102 (1958), pp. 154-7